

ヨハネによる福音書 8:48-59；「御子の栄光」——2026年10月4日

I. 歓迎と振り返り

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。主であり救い主であるイエス・キリストを礼拝するために、皆さんと共にここに集まることができて、本当に嬉しい。

1. 初めでお越しの方や、オンラインで視聴されている皆様、ようこそ。

B. 礼拝を続ける前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。

1. 子供たちが移動している間に、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第8章の箇所を開いてほしい。

C. 私たちはこれまで、ヨハネによる福音書第8章を少しずつ読み進めてきた。仮庵の祭りが終わった翌日、神殿の敷地内で何が起きたのか、その詳細を見てきたのだ。

- 姦淫の現場で捕らえられた女性をめぐる出来事と、イエスがその状況をどう対処したかを見てきた。これは、宗教指導者たちがイエスを罠にかけるために仕組んだ場面だった。しかしイエスは、告発者たちが一言も発することなく、一人また一人と立ち去るように仕向けることで、見事にその状況を切り抜けたのだ。
- また、イエスが「わたしは世の光である。わたしに従う者は、決して暗闇の中を歩むことはなく、いのちの光を持つ」と宣言した、その大胆な「わたしはある」という宣言についても考察した。その学びの中で、偉大なる「わたしはある」としてのイエスの証しの、さまざまな側面について確認した。
- そして先週は、その日イエスの周りに集まった人々の中で、イエスが一連の対比を通じて明らかにした現実について考察した。

- イエスは、表面的な信仰と真の信仰を、罪への束縛と罪からの解放を、それぞれ対比させた。また、アブラハムの子孫であることと、アブラハムの子であることの違いを対比させた。そして最後に、ユダヤ人たちが真理を受け入れるどころか、むしろそれに抵抗していたことに注目した。
- 先週の聖句では、ユダヤ人たちがいかに表面的な信仰を持ち、罪の束縛下にあり、単にアブラハムの子孫に過ぎず、いかに真理に抵抗していたかを指摘した。
- イエスは真の信仰を求めておられ、彼らに罪からの解放を、そしてもし私たちが御言葉の真理を受け入れるならば、単にアブラハムの子であるだけでなく、父なる神の子となり、神と共に相続人となる機会を差し出しておられたのだ。

4. そして、それが今日の聖書箇所へとつながり、イエスが宗教指導者たちと引き続き対峙する様子を見ていく。

D. 今朝の聖書箇所はヨハネによる福音書第8章48節から59節であり、今回の学びのタイトルは「御子の栄光」とする。

- 皆さんもすでにヨハネによる福音書第8章を開いておられることを願う。もしそうなら、神と御言葉に敬意を表して、立ち上がることができる方は全員、立ち上がっていただきたい。私は自分の聖書から、この箇所を最初から最後まで読み上げるつもりだ。

2. 私はNKJV版聖書から読む。別の訳本を読んでいる場合でも構わない。私が自分の聖書から読む間、各自の聖書でできるだけ追いかけてほしい。ヨハネは、イエスが神殿で人々に教え、宗教指導者たちから詰め寄られたあの日の出来事を、引き続き記している。

3. 48節からこの章の終わりまで、私と一緒に読んでほしい。（R & P）

II. 導入；

A. この箇所では、イエスと宗教指導者たちとの応酬が続いている。

- この章を振り返ると、このやり取りはすでにしばらく続いている。宗教指導者たちが何かを言ったり、何らかの非難を投げかけたりすると、イエスはそれに応答する。
- イエスは大胆な宣言を行い、それに対して宗教指導者たちが反応する。こうしたやり取りが繰り返される。

B. そして、このやり取りを読み進めるにつれ、緊張が高まっていく。イエスは彼らのあらゆる質問に答え続け、宗教指導者たちはイエスを告発するための新たな切り口やアプローチを模索せざるを得なくなっている。

- 彼らは繰り返し、自分たちが何を言おうと、イエスを何で告発しようと、イエスにはそれに対する返答があり、答えがあることに気づかされる。彼らの言うことや告発はどれもイエスに食い込まず、彼らの忍耐は限界に近づいている。

C. 今朝の聖書箇所では、イエス、すなわち神の御子と、「尊厳」あるいは「栄光」というテーマに焦点が当てられている。

- この箇所では、「名誉」という言葉、あるいはその派生形が5回登場し、「栄光」という言葉がもう1回使われている。ここで使われている「栄光」という言葉は、「名誉」の意味を含んでいる。実際、今朝取り上げる箇所では、同じギリシャ語が「名誉」と「栄光」の両方に訳されているのだ。
- こうして、この応酬は、キリストの「名誉」と「栄光」が議論される段階にまでエスカレートした。イエスはこの応酬の中でいくつかの大胆な宣言を行ってきたが、最も大胆な宣言を、この議論の最後にとっておかれたのだ。

D. 今回の集いでは、私がこの聖句を、それぞれ「御子」、すなわちイエス・キリストに関わる五つのセクションに分けてみた。

- この箇所を読み進める中で、私たちが語られている内容を理解するだけでなく、それを私たちの心と生活に当てはめていけることを願っている。
- 今日は、聖餐式をもって礼拝を締めくくる。ですから、この集いが、私たちがカルバリの十字架でキリストが私たちのために成し遂げてくださったことを振り返る聖餐式の時間へと導いてくれることを願っている。

E. しかし、その前に、聖書の箇所、特に「御子に対する侮辱」について扱った最初の部分について深く掘り下げていこう。48～50節と一緒に読もう。

III. ヨハネによる福音書8章48～50節；御子への侮辱

A. 今朝の聖書箇所は、イエスが直前に語った内容に対する直接的な反論から始まっている。

1. これに先立ち、イエスは「神から出た者は神の言葉を聞く。あなたがたが聞かないのは、あなたがたが神から出ていないからだ」（47節）と語っていた。
2. 宗教指導者たちは、自分たちが神に属していないとイエスが言われたのを聞いて、ひどく腹を立て、47節で侮辱や悪口に走ったのだ。
3. そしてここで、ユダヤ人たちがどのような手段に追い込まれたかに注目することが重要だと思う。その前の46節で、イエスは「あなたがたのうち、だれがわたしを罪で告発できるか」（ヨハネ8:46a）と問いかけていた。
 - a. イエスは、自分が犯したあらゆる罪について証言するよう求めたのだ。イエスは、自分がどの罪を犯したのか、彼らがどのようなことで自分を告発し、有罪と断じることができるのかを知りたかったのだ。
 - b. そして、彼らが侮蔑的な言葉を使うしかなかったという事実は、彼らに他に手段がなかったことを示している。誰もイエスを罪や過ちで告発することができなかったため、彼らは侮辱や悪口に甘んじざるを得なかったのだ。

B. 彼らはイエスをサマリア人と呼び、悪霊に取りつかれている、つまり「悪霊憑き」であると非難した。

1. ヨハネの福音書の学びを通じて、サマリア人とユダヤ人の間の歴史についてすでに少し触れた。要するに、彼らは互いに大いに嫌悪し合っており、それぞれが自分たちは正しく、相手は間違っていると信じていたのだ。
 - a. サマリア人は、ユダヤ人からある種の混血と見なされ、そう扱われていた。
 - i. イスラエルの北部の部族が捕囚にされた後、アッシリア人は様々な民族を送り込み、残された少数のユダヤ人と結婚させ、混血させた。
 - ii. その結果、彼らはこれらの外国人から様々な偶像崇拜の習慣を取り入れ、ユダヤ教と他の異教の伝統を混ぜ合わせた独自の宗教を生み出した。彼らは独自の神殿を建て、自分たちがアブラハムの真の子孫であると主張した。
 - b. ユダヤ人たちは、自分たちがアブラハムの真の子孫であり、サマリア人よりも優れていると信じていた。彼らはサマリア人とのいかなる歴史的つながりも否定しようとし、可能な限り彼らから距離を置こうとした。
 - c. ユダヤ人にとって、誰かを「サマリア人」と呼ぶことは、その人の血統を疑い、混血であるとか、人間以下であるとか、さらには神の最も厳しい裁きに値する偶像崇拜者であると非難することに他ならなかった。

2. 悪霊に取りつかれていると非難されることさえ、これほどひどいことではなかった。さて、彼らがこのような非難をしたのはこれが初めてではなく、最後でもない。彼らは以前、ヨハネによる福音書7章20節でもそう言い、またヨハネによる福音書10章20節でもそう言うことになる。

- a. 宣教活動の初期、パリサイ人たちは、イエスが「悪霊の支配者であるベルゼブブの力によって悪霊を追い出している」と主張した [マタイ12:24]
- b. つまり、これは新しい非難でも侮辱でもない。

C. しかし、イエスがどのように応答したかに注目してほしい。49節で、イエスは侮辱に侮辱で応じるのではなく、単に冷静に、自分には悪霊が宿っているという主張を否定し、たとえ彼らが自分を辱めても、自分は父を敬おうとしていると述べている。

1. 私はこのイエスの応答が大好きだ。彼らがイエスの罪や過ちを立証できなかったとき、彼らは悪口や侮辱に訴えたのだ。
2. しかし、イエスは彼らのレベルに降りることはなかった。彼らに向かって侮辱を浴びせ返すようなことはしなかったのだ。そして、私たちはイエスのこの模範から、一つや二つのことを学ぶことができる。
 - a. 私たちの言葉は、多くのトラブルを招くことがある。肉的反応に駆られ、侮辱に対してさらに激しい侮辱で返そうとしてしまい、取り返しのつかない鋭い非難の応酬という有害な言葉の戦いに簡単に巻き込まれてしまうのだ。
 - b. 一度口から出てしまった言葉は、取り消すことはできない。「言い直して」元に戻すこともできないのだ。だから、私たちは言葉に気をつけなければならない。「すべての人は、聞くことに速く、話すことに遅く、怒ることに遅くあれ。人の怒りは、神の義をもたらさないからである」とヤコブは述べている。（ヤコブ1:19-20）
 - c. 使徒ペテロも、イエスが私たちに残してくださったこの模範について次のように記している。「あなたがたは、このために召されたのである。キリストも、私たちのために苦しみを受け、私たちに模範を残して、その足跡に従うようにされたからだ。『罪を犯さず、その口には偽りがなかった』方。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅し返さず、ただ、正しく裁かれる方にお委ねになった。」（ペトロの手紙一 2:21-23）
 - d. イエスはののしられたが、ののしり返さなかった。その代わりに、ただ義にかまって裁かれる主にそのことを委ねたのだ。そして私たちも、この模範に従うのがよい。
 - e. 人々があなたについて意地悪なことを言ったり、あなたに対して虚偽の告発をしたりしても、動揺して相手のレベルに下がる必要はない。真実を語り、それをただ主に委ねればよい。主が対処してください。主はすべてのことを見通し、知っておられ、正しく裁いてくださるのだ。
 - f. 主が私たちを顧み、守ってくださいと信頼できる。泥仕合や悪口合戦に加わる必要はない。ただそれを主に委ね、主の御手に委ねて信頼すればよいのだ。

D. さて、50節でイエスは、私たちが見逃してはならない重要なことを語っている。それは、イエスを冒犯する者たちに待ち受ける運命についての、真摯な警告だ。

1. イエスはこう言われる。「わたしは自分の栄光を求めない。求める者、裁く者がおられる」。イエスが「わたしは自分の栄光を求めない」と言われるとき、強調されているのは「わたし」という言葉だ。イエスはご自身の栄光を見ておられない。
2. しかし、「求める方がおられる」と仰る時、そこにはイエスの栄光を求めようとする方がおられるという意味が込められている。イエスはご自身の栄光を求めないが、イエスを栄光に輝かせ、尊ぶことを求める方がおられ、その方が裁き主なのだ。
 - a. イエスが指しているのは、他ならぬ父である。イエスはご自身の栄光を求めないかもしれないが、父は求める。父は御子を栄光に輝かせようとする。そして裁きを行うのは父である。その裁きは、あなたが御子を信じることによって御子を敬ったかどうかに基づいて行われる。
 - b. つまり、ここでイエスはこれらの宗教指導者たちに警告を与えているのだ。イエスは、ご自身のご自身の栄光を求めないが、父は求めており、彼らがイエスをどのように扱ったかに基づいて、最終的に彼らに対して裁きを下すのは父であることを明確にしている。
 - c. 彼らはイエスを辱めていた。イエスをサマリア人と呼び、悪霊に取りつかれていると言ったのだ。イエスは彼らに、裁きが迫っていること、そしてその裁きは、彼らがイエスを御子として敬ったかどうかに基づいて下されることを警告しているのだ。

E. 本文を続け、51節の次の部分「御子からの招き」を見ていこう。ここでイエスが何と言っているか確認しよう。

IV. ヨハネによる福音書8章51節；「御子からの招き」

- A. イエスは先ほど、迫り来る裁きについて彼らに警告した。御子を栄光に包み、敬う者は、キリストを拒む世界に対して裁きを下す者その人であると警告したのである。
- B. そしてそれに対し、イエスはここで、その裁きから逃れるための招きを提示している。彼らからの侮辱や厳しい言葉にもかかわらず、イエスは彼らに驚くべきものを差し出しているのだ。
 1. ここでイエスが語っているのは永遠のことだと理解しなければならない。イエスが裁きに言及するとき、それは永遠の裁きについて語っているのだ。死について語るとき、それは永遠の死について語っているのだ。
 2. 私たち全員が直面する永遠の裁きとは、私たちの罪に対する裁きである。そして、罪の報いは死である。したがって、イエスが死から逃れることについて語るとき、それは私たちの罪に対する裁きから逃れることを意味しているのだ。
 3. イエスはまず、人々に差し迫った裁きについて警告し、今やその裁きから逃れるための招きを差し出しているのだ。
- C. そして、この招きの具体的な点に注目しよう。

1. まず第一に、以前イエスの他の招きについて触れた通り、この招きは誰にでも向けられている。イエスは「もしだれでも.....わたしの言葉を守るなら、決して死を見ることはない」と語っている。

- a. この招きは、あらゆる男性、女性、そして子供に向けられている。ユダヤ人、ギリシヤ人、サマリア人、アメリカ人、日本人、そして世に存在するあらゆる国籍の人々に向けられているのだ。
- b. それは、罪の束縛に囚われている者たち、霊的な抑圧に縛られている者たち、宗教の中で迷っている者たち、この世に属する者たち、そして世が「救いようがない」と見なしている者たちに向けたものだ。
- c. イエスが差し出すこの招きは、誰にでも向けられている。神の愛と恵みの及ばない者は一人もおらず、イエスの申し出を受け入れることを歓迎されない者など一人もいないのだ。

2. イエスは、「わたしの言葉を守る者」なら誰でも、と語った。これはもちろん、イエスの言葉に従い、その言葉を信じ、その言葉を実践することを意味する。その言葉に信仰を置くということだ。

- a. イエスの教えは、御自身が命を与え、しかも豊かに与えるために来られたということだ。その教えとは、もし罪を告白すれば、神は忠実で義なる方として、私たちの罪を清めてくださるというものだ。その教えこそが福音のメッセージであり、イエス・キリストの良き知らせ、すなわち御自身の死、埋葬、そして復活である。イエスが勝ち取った勝利は、信仰による恵みを通して、私たちに与えられているのだ。

3. そしてイエスは、もし御言葉を守るなら、「決して死を見ることはない」と語っている。

- a. イエスはここでも、仮定法を用いて二重否定を用いている。これはギリシヤ語の文法において、否定を表す最も強い表現である。
- b. 単に「死を見ることはない」というだけでなく、絶対に、決して、たとえ百万年経っても、死を見ることはないということだ。それは全くあり得ないことである。イエスは、他の誰にも到底及ばないような、ある種の永遠の保証を提示しているのだ。
- c. もし私たちが御言葉を守り、御言葉を信じ、従い、イエスが宣べ伝えるメッセージに従うなら、私たちは永遠の保証を得て、神の裁きから来る永遠の死を、決して、決して味わうことはないだろう。天国における私たちの居場所は、イエス・キリストにおいて、そしてイエス・キリストを通して確かなものとなる。

4. 主の御前にいるすべての人々に、主はなんと素晴らしい招きをくださっていることが。

5. そしてさらに驚くべきことは、その招きが今日でもなお有効であるということだ。

6. イエスは、かつて神殿で御自身の前にいたすべての人々にそうされたように、私たちにこう呼びかけよう。「だれでもわたしの言葉を守る者は、決して死を見ることはない。」これは、神の御子ご自身がなされた永遠の保証の約束だ。なんと素晴らしい招きだろう。この招きを受け入れ、イエスに従う者たちにとって、それは驚くべきことであり、人生を変えるものとなる。

D. 本文に戻ろう。52～55節の次の部分、「御子の正体」について見てみよう。私が聖書を読むので、皆さんも自分の聖書で追ってほしい。

V. ヨハネによる福音書 8章52～55節；御子の正体

A. ユダヤ人たちは、イエスの申し出を受け入れるどころか、アブラハムや預言者たちを死んだ者と見なしていたことから、イエスが悪霊に取りつかれていると確信したと主張し、さらに強硬な態度に出た。

1. 彼らはイエスの言葉を誤解し、自分の罪を悔い改めて御子を敬う代わりに、罪の中に留まり続け、イエスが悪霊に取りつかれているという主張によって、引き続きイエスを辱め続けた。
2. ここでの彼らの考えには欠陥がある。彼らは、イエスが「御言葉に従う者は決して肉体の死を経験しない」と主張しているのだと考えているのだ。
3. 彼らは依然として肉体的なことに固執しており、イエスが語っている霊的な真理を完全に見失っているのだ。
 - a. 彼らはヨハネの福音書全体を通して、これを繰り返し行ってきた。人々はイエスの霊的な真理を、肉体的な真理と誤解してきたのだ。
 - i. ヨハネによる福音書第3章で、ニコデモが夜、イエスのところに来たとき、イエスは彼にこう言われた。「まことに、まことに、あなたに告げる。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない。」（ヨハネ3:3）
 - ii. ニコデモはどのように応えたか。「年をとった人が、どうして再び生まれることができるのか。もう一度、母の胎内に入って生まれることができるだろうか。」（ヨハネ3:4）
 - iii. 井戸端の女に対して、イエスはこう言われた。「わたしが与える水を飲む者は、決して渇くことがない。わたしが与える水は、その人のうちで、永遠の命へと湧き出る泉となる。」すると女は言った。「先生、その水をください。そうすれば、もう渇くこともなく、水を汲みにここに来る必要もなくなります。」（ヨハネ4:14-15）
 - iv. 第6章で、イエスはご自身を「いのちのパン」、すなわち「天からのパン」であると語られた際、こう言われた。「わたしの父は、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださる。神のパンとは、天から下って来て、世にいのちを与える方である。」人々はどのように応えたか。「主よ、そのパンをいつもわたしたちに与えてください。」（ヨハネ6:32b-34）
 - v. イエスが「まことに、まことに、あなたがたに告げる。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はない。」（ヨハネ6:53）と語ったとき
 - vi. この言葉は人々を不快にさせた。彼らは「この言葉は聞きづらい」と言い、多くの者がイエスから離れ、もはやイエスと共に歩まなくなった。
 - b. 彼らは理解していなかった。イエスが物理的なパンについて語っているのだと思ったのだ。あの女は、イエスが物理的な水について語っているのだと思った。ニコデモは、イエスが物理的な誕生について語っているのだと思った。しかし、イエスは霊的な事柄について語っていたのに、彼らは皆、その真意を見逃していたのだ。
4. 彼らはイエスが肉体的な死について語っていると思い込んだため、誤って、イエスは「死を味わった者は皆、霊的に不十分だった」と主張していると結論づけてしまった。つまり、父アブラハムやすべての預言者たち——神の友、神の使者として知られていた人々——でさえ、死を味わったという理由で、何らかの点で劣っているのだと。

a. しかし、イエスが言っているのは、そんなことではない。イエスは霊的な意味で語っているのだ。イエスは、永遠の死から逃れることについて語っているのだ。

b. そして、これは実際にアブラハムや預言者たちが成し遂げていたことなのだ。彼らの前提のすべては、アブラハムや預言者たちが肉体的には死んでいたという信念に基づいており、彼らが霊的にはまだ生きていたという事実を、彼らは全く理解していなかったのだ。

c. イエスは、死者の復活について語る際、この問題に触れた。イエスはこう言った。「しかし、死者の復活については、神があなたがたに語られたことを読まなかったのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と。神は死者の神ではなく、生ける者の神である。」（マタイ22:31-32）

d. つまり、彼らの思考プロセス全体が誤っており、イエスが実際に語っていることに基づいていないのだ。

B. 彼らは、イエスがアブラハムや預言者たちよりも優れていると主張しているのだと考えている（確かにイエスは優れているが、それはイエスが言わんとしていることではない）。そして、「あなたは自分を何者だと思っているのか」と問う。要するに、「お前は自分が何者だと思っているのか」と尋ねているのだ。そして、イエスがどのように答えたかを見てみよう。

C. イエスは要するにこう言っているのだ。「私は自分を称えるためにここにいるのではない。もし私が自分を称えるなら、その栄光は何の価値もない。私を称えるのは私の父である。あなたがたが自分たちの神だと主張するその方が、私を称える方なのだ。」

1. イエスは、彼らが神を自分たちのものだと言っていると言いが、その意味するところは、彼らが嘘をついているということだ。その方は実際には彼らの神ではない。もしそうであれば、彼らはイエスがしているのと同じことをし、イエスの導きに従っているはずだからだ。父は御子を尊ぶが、彼らはそうしない。その代わりに、彼らはイエスを侮り続け、イエスを非難し続けているのだ。
2. ユダヤ人たちが**持っているのは宗教であって、関係ではない**。彼らは自分たちで作り上げ、選んだ神をでっち上げたのだ。しかし、それは主ではない。
3. イエスはこう言われた。「あなたがたは彼を知らないが、私は彼を知っている。もし私が『私は彼を知らない』と言えば、私はあなたがたと同じような嘘つきになるだろう。しかし、私は彼を知っており、彼の御言葉を守っている。」
4. 興味深いことに、ギリシャ語でイエスは、英語に「知る」と訳される言葉に対して、二つの異なる単語を用いている。

a. イエスが「あなたがたは彼を知らない」と言ったとき、使われた動詞は「ギノスコ (ginosko)」であり、これは経験的な知識を指す。観察や経験を通じて得られるものだ。彼らには父との経験がなく、父との関係もなかった。

b. イエスが「しかし、私は彼を知っている」と言ったとき、別のギリシャ語の単語を使っている。それは「オイダ (oida)」という単語で、ある在り方から生じる知識、直感的な知識、完全な知識を指す。

c. イエスは単に経験的に父を知っているだけでなく、父と一つであることから来る、直感的で完全な知識をもって父を知っているのだ。

5. ユダヤ人たちは、そのような知識を持っていなかった。彼らは神についての経験的な知識さえ持っておらず、ましてやこの親密で完全な知識など持ち合わせていなかったのだ。
6. 彼らには宗教があり、行いがあり、儀式や規則があった。しかし、神との関係はなかった。彼らは神を知らなかったのだ。神について知ってはいたが、個人的に神を知っていたわけではない。
7. これこそが、宗教と関係性の違いだ。宗教とは、儀式や規則、規定を通じて神に到達しようとする人間の試みであり、それはキリスト教ではない。キリスト教とは関係性のことだ。私たちが神に手を伸ばすのではなく、神が私たちに手を差し伸べ、神との関係へと招いてくださるのだ。
8. ここでユダヤ人たちは、神を知っていると主張しながらも、神の御子を拒んでいる。

D. 次に、56節と57節の「**御子への洞察**」について扱うセクションに進もう。一緒に見ていこう。

VI. ヨハネによる福音書 8:56-57；「御子に関する洞察」

A. ユダヤ人たちはアブラハムを持ち出し、イエスは56節でアブラハムについて大胆な主張をされている。「彼らの『父であるアブラハムは、その日を見ることを喜び、それを見て喜んだ』」。そこで疑問が生じる。それはいつのことなのか？

1. アブラハムはいつイエスの日を見たのか、あるいはイエスの到来の時期を指しているのか。57節におけるユダヤ人たちの反応は、基本的にこの点に集約される。まだ50歳にも満たないイエスが、それから2,000年近くも前に生きたアブラハムと、どうして関わりを持つことができたというのか。
2. さて、これについてはいくつかの見方がある。
 - a. 一つの解釈としては、アブラハムは自分に与えられた約束を通して、イエスとその到来を見据えていたと言えるだろう。創世記において、神はアブラハムに未来を見据えたある約束を与えた。彼の子孫が全地を祝福するという約束、主と共に過ごす未来の住まいについての約束。そして、彼を通して現れる子孫についての約束である。
 - i. 『ヘブライ人への手紙』は、「[アブラハムや『信仰の殿堂』に名を連ねる彼のような人々]は皆、信仰のうちに死に、約束を受けたわけではないが、それを遠くから見て確信し、それを受け入れ、自分たちがこの地上では旅人であり、寄留者であることを公言した」と述べている。（**ヘブライ人への手紙 11:13**）
 - ii. したがって、イエスが「アブラハムは自分の日を見た」と言われたとき、それはアブラハムが信仰によってイエスの到来を見据え、まだ実現していない約束を確信し、それを受け入れ、天国でイエスと共にいたいという切なる願いを告白したことを指しているのかもしれない。
 - b. もう一つの解釈としては、イエスの到来を予表し、待ち望んでいた、アブラハムが経験したいくつかの型や影を通して理解できるのかもしれない。

- i. 具体的には、創世記22章のことを考えている。そこでは、アブラハムがモリヤの山に登り、神を敬い喜ばせるために、たった一人の息子を犠牲として捧げようとした。
 - ii. 彼とイサクが山を登っていく途中、イサクは父にこう尋ねた。「『父よ！』すると[アブラハム]は『はい、ここにいるよ、わが子よ』と答えた。すると[イサク]は『ほら、火と薪はあるが、全焼のいけにえとなる子羊はどこにあるのか』と言った。アブラハムは『わが子よ、神ご自身が全焼のいけにえとなる子羊を用意してくださる』と答えた。」（**創世記 22:7-8**）
 - iii. アブラハムは息子を縛り、祭壇の上に置き、ナイフを振り上げて息子に突き刺そうとしたその時、主の御使いが彼に声をかけ、止めるよう命じた。
 - iv. おそらくその瞬間、神はアブラハムに、これから起こることを予見させるような啓示を与えたのだろう。神が、私たちの罪のために、ご自身を小羊としてささげるという事実を。
- C. 主の御使いについて言えば、イエスは創世記18章でアブラハムが「主の御使い」と交わした様々な出来事について語っているのかもしれない。
- i. 覚えているかもしれないが、アブラハムのもとに二人の天使と、「主の御使い」と呼ばれる第三の人物が訪れた。多くの人々は、これが「キリストの顕現」、すなわち受肉前のイエス・キリストの出現であると信じている。
 - ii. その記述から明らかなのは、アブラハムが話している相手が主、すなわち人の姿をとった神であるということだ。おそらくイエスが語っていたのは、このことだったのだろう。
- d. また、創世記14章に登場するメルキゼデクもあり、その称号は「サレムの王」、あるいは「平和の王」であった。彼はパンとぶどう酒を持ってアブラハムを迎え、アブラハムから十分の一の献げ物を受け取った。彼もまた、キリストの受肉前の現れであったのではないかと考える者もいる。
- e. もう一つの可能性として、当時のアブラハムについて語られているという解釈もある。ルカによる福音書第16章には、ラザロと金持ちの物語が記されている。この物語では、ラザロも金持ちも死んで異界へ行く。
- i. ラザロは、一般に「楽園」あるいは「アブラハムの懷」と呼ばれる場所、すなわち安らぎと休息の場所へ行く。
 - ii. 金持ちはハデスへ行き、そこで苦しみを受けた。そして目を上げると、遠く離れた別の場所に、アブラハムと貧しい物乞いがいるのを見た。
 - iii. 金持ちはアブラハムに叫び、その物乞いを遣わして、水の端に指先を浸し、自分の舌を冷やしてほしいと頼んだ。しかしアブラハムは言った。「子よ、思い起こせ。あなたは生きている間に良いものを受け、同様にラザロは悪いものを受けた。しかし今、彼は慰められ、あなたは苦しめられている。さらに、これらすべてに加え、私たちとあなたとの間には大きな溝が引かれており、ここからあなたのもとへ渡ろうとする者は

ここからはあなたのもとへ行くことはできず、あちらからもこちらへ来ることはできないのだ。」（**ルカ16:25-26**）

Ⅳ. つまり、アブラハムはイエスの時代に生きており、当時地上で何が起きているかを把握していたのだ。彼は「アブラハムの懐」と呼ばれる場所にいて、約束の成就を待っていた。

Ⅴ. イエスもまた、このことを指して語っているのかもしれない。

3. 実のところ、アブラハムがいつイエスの時代を目撃したのか、確かなことは言えないが、それは本質的な問題ではない。重要なのは、アブラハムが確かにイエスの時代を目撃し、それを大いに喜んだということだ。
 - a. 「喜んだ」という語は、ギリシャ語で大きな興奮と熱意を表す言葉だ。喜びのあまり跳びはねる様子を形容するために用いられる。アブラハムは、イエス・キリストの現れに、この上ない恍惚とした喜びと歓喜に満たされていたのだ。
 - b. アブラハムはイエスの日について特別な洞察を与えられ、喜んだ。彼はイエスを愛し、その到来に有頂天になったのだ。
 4. そこに大きな対照がある。ここにいるユダヤ人たちはアブラハムの子孫でありながら、キリストを憎み、殺そうとしている。それなのに、**アブラハムはキリストを愛し、キリストを称えたのだ**。
 5. イエスがどのようなお方であるかを深く理解し、イエスを信じるほど、私たちはイエスの御業を祝い、喜び祝うべきなのだ。
 - a. 感謝すべきことは山ほどあるのではないか。キリストの愛と、キリストが私たちに与えてくださった罪の赦しを知っている以上、喜び祝うべきことは数え切れないほどある。私たちの名はいのちの書に記されている。私たちはキリストにあって、またキリストを通して永遠の保証を得ており、それこそが私たち全員を、アブラハムのように喜び祝わせるべき理由だ。キリストが私たちのために成し遂げてくださったことを知り、喜びのあまり跳び上がり、この上ない喜びに満たされるべきなのだ。
- B. さて、最後の節を見てみよう。そこでは、イエスが58節と59節で驚くほど大胆な宣言をしている。「**御子による主張**」だ。

VII. ヨハネによる福音書8章58～59節；「御子による断固たる主張」

- A. ユダヤ人たちは53節の終わりに、「あなたは自分を何者だと思っているのか」、あるいは「自分を何者だと称しているのか」と尋ねた。ここでイエスはすべてを明らかにし、遠慮することなく、ご自身が「偉大なる『わたしはある』」であることを主張する。
- B. イエスが「アブラハムが生まれる前から、わたしは『わたし』である」と言うとき、**イエスはご自身****が全能の神であることを**主張しているのだ。つまり、アブラハムが存在するようになる前から、イエスは存在していたということだ。かつて存在していたのではなく、今この瞬間も存在し、常に存在し続けてきたのだ。
 1. アブラハムは被造物であった。しかし、イエスは常に存在し、今も存在し、永遠に存在し続ける永遠の神である。イエスには始まりも終わりもない。イエスは永遠に存在し続けるのだ。
 2. これは、モーセが神の名を尋ねた際に、神がモーセに与えた名への言及である。神はモーセにこう

言われた。「わたしは『わたしはある』である」……「イスラエルの子らにこう告げよ。『わたしはある』が、わたしをあなたがたのもとに遣わしたのだ。」（**出エジプト記3:14**）

- 燃える荊棘の中からモーセに語りかけたその声は、全能の神の声であり、その御名は「ワレワレ」である。イエスは、ご自身が「ワレワレ」であると述べている。第8章の終わりにイエスがここで行ったこの宣言以上に、神性を断言するものはない。

- C. そして、イエスがそう言ったとき、ユダヤ人たちはその意味を正確に理解していた。だからこそ、彼らは石を拾い上げ、イエスを石打ちにしようとしたのだ。
- レビ記24章には、冒流の罰として、その者は石打ちの刑に処され、死刑にされるべきであると記されている。（**レビ記24:16**）によれば、主の御名を冒流する者はすべて、石打ちの刑に処され、死刑にされることになっていた。
 - ユダヤ人たちは、イエスがこれほど大胆な発言——彼らの視点からすれば冒流的な発言——をしたため、その場でイエスを石打ちにしようとしたのだ。
- D. しかし、イエスは冒流的なことを言っていたわけではない。彼は真実を語っていたのだ。彼は以前にも、ご自身の神性や神聖な性質について、多くの暗示的な発言をしてきたが、これほど率直で明快なものではなかった。
- イエスは、自分の言っていることが誤解されるのを望んでいなかった。可能な限り単純かつ直接的に語ったのだ。「アブラハムが生まれる前から、わたしは『わたし』である」と述べ、自らを肉となった全能の神であると明かした。

VIII. 結論／聖餐；

- A. この聖書の箇所を通して、イエスに対する様々な反応を見てきた。ユダヤ人たちはイエスを侮辱した。アブラハムはイエスを喜びとした。父なる神はイエスを尊び、栄光を授けた。今日、私たちが考えるべき問いは、自分たちがどのように応答したかということだ。
- 私たちは、御子に信仰を置くことによって、御子を尊んだらうか。御子を喜び祝うことによって、御子を尊んだらうか。御子との関係を深めることによって、御子を尊んだらうか。恥じることなく御子を愛することによって、御子を尊んだらうか。
 - もしかすると、今日ここにいるあなたは、最近、あるいはこれまで一度も、自分の人生において主を敬うためにほとんど何もしてこなかったと認めざるを得ないかもしれない。もしそうなら、その招きは今日もお有効だ。今日、あなたは主の御言葉を守り、その御言葉に信仰と信頼を置くことによって、主を敬うことができる。
- B. さて、ここから聖餐の時間に移る。聖餐は、キリストが私たちに命じられたものである。私たちは聖餐を執り行い、キリストが私たちのためにしてくださったことを思い起こすことによって、主を敬うのだ。
- 今朝ここにいる方で、自分の罪を告白し悔い改める必要があるなら、聖餐式に与えるこの時に、そうすることを勧める。イエスの御体はあなたのために砕かれ、御血はあなたのために流されたのだということを知っておいてほしい。
 - パンと杯をいただくとき、私たちが思い起こしているのはまさにそれだ。私たちは、十字架上のキリストの御業、すなわち、私たちを贖い、洗い清め、御自身のものとして招くために、キリストがご自身の命をもって支払われた代価を思い起こしているのだ。
 - 私の願いは、この聖餐の時間が心温まるものになることだ。親密な時間になることだ。これから

数分間を、ただ主と共に過ごす時間として、主と交わり、私たちに注がれた恵みを喜び祝う時間として使ってほしい。

- C. これから礼拝チームがここへ上がってくる。そして、案内係が聖餐の要素を配り始める。そこで、今日皆さんにやってほしいことがある。
1. これから数分間、主と共に過ごしてほしい。案内係が聖餐の要素を配り終えたら、それを手に持ったままにしておいてほしい。
 2. 礼拝チームが賛美を導く。もしよければ、ぜひ一緒に歌ってほしい。あるいは、そのまま祈り続け、主と過ごす時間を持続けてもよい。
 3. 歌が終わったら、私が再び前に出て、皆で聖餐を分かち合うように導く。主と交わりを持とう。
- D. (再び壇上に戻り、コリントの信徒への手紙一 11章23～26節を読み上げ、順序通りに聖餐の要素を分かち合い、祈りで締めくくる) (1コリント11:23-26)